

クイック スタート ガイド

- Cisco Unified Communications Manager 8.6
- Cisco TelePresence MX シリーズ
- Cisco TelePresence EX シリーズ
- Cisco TelePresence Codec C シリーズ
- Cisco TelePresence Profile シリーズ
- Cisco TelePresence Quick Set C20
- Cisco TelePresence SX20 Quick Set



ソフトウェア バージョン TC5 および Cisco Unified Communications Manager 8.6
2012 年 6 月

Cisco TelePresence 製品をお選びいただきありがとうございます。

お使いのシスコ製品は、長年にわたり安全かつ信頼できる操作を行えるよう設計されています。

この製品ドキュメンテーションは、Cisco Unified Communications Manager 8.6 で TelePresence エンドポイントを設定する管理作業者を対象としています。

このガイドの主な目的は、ユーザの目標とニーズに対応することです。このガイドについてのご意見、ご感想をお聞かせください。フィードバックのページに進むには、[ここをクリックしてください](#)。

定期的にシスコの Web サイトにアクセスし、このガイドの最新版を入手することを推奨します。

ユーザドキュメンテーションは次の URL から入手できます。

▶ <http://www.cisco.com/go/telepresence/docs>

本ガイドの使用方法

本書上部のメニューバーと目次の各項目には、すべてハイパーリンクが設定されています。クリックすると、そのトピックに移動します。

目次

前提条件	3	CUCM の設定	17
前提条件	4	Cisco Unified Communications Manager 8.6 の設定	18
ソフトウェアの正しいバージョンのロード	4	Cisco Unified Communications Manager の相互運用の設定 ...	19
システムを TMS から CUCM へ移行する場合	4	プロダクト固有の設定	19
TelePresence のエンドポイントの設定	5	付録	20
TelePresence のエンドポイントの設定の概要	6	パスワードによるエンドポイントの管理	21
TelePresence のエンドポイントを出荷時の初期状態にリセットする	6	Cisco TelePresence のエンドポイントでの Cisco Discovery	
プロビジョニング モードの設定	6	Protocol について	22
標準帯域の設定	6	シスコ Web サイト内のユーザドキュメンテーション	25
タッチ インターフェイスを使用して TelePresence のエンドポイントを出		知的所有権	26
荷時の初期状態にリセットする	7		
エンドポイントを出荷時の初期状態にリセットする	7		
タッチ インターフェイスを使用してプロビジョニング モードを設定する			
プロビジョニング モードの設定	8		
タッチ インターフェイスを使用して標準帯域を設定する	9		
プロビジョニング モードの設定	9		
OSD/ リモート コントロールを使用してプロビジョニング モードを設定す			
る	10		
プロビジョニング モードの設定	10		
OSD/ リモート コントロールを使用して標準帯域を設定する	11		
標準帯域の設定	11		
Web インターフェイスを使用してプロビジョニング モードを設定する			
プロビジョニング モードの設定	12		
Web インターフェイスを使用して標準帯域を設定する	13		
標準帯域の設定	13		
API/CLI コマンドを使用して TelePresence のエンドポイントを出荷時の			
初期状態にリセットする	14		
API/CLI コマンドを使用してプロビジョニングを設定する	15		
API/CLI コマンドを使用して通話を設定する	16		

第 1 章

前提条件

前提条件

この文書は、Cisco TelePresence エンドポイントを Cisco Unified Communications Manager に導入するために必要な情報をまとめたクイック ガイドです。

このガイドの対象となる製品は次のとおりです。

- Cisco Unified Communications Manager - CUCM 8.6
- Cisco TelePresence MultiPoint Switch - CTMS 1.8
- Cisco TelePresence Manager - CTS-MAN 1.8
- TC ソフトウェアを使用している Cisco TelePresence 製品
 - TC 5.0 以降
 - MX200
 - MX300
 - EX90
 - EX60
 - Codec C90
 - Codec C60
 - Codec C40
 - Codec C シリーズを使用する Profile
 - Quick Set C20
 - TC 5.1 以降
 - SX20 Quick Set

ソフトウェアの正しいバージョンのロード

設定を開始する前に、エンドポイントと CUCM に正しいソフトウェアがインストールされていることを確認してください。

- Cisco Unified Communications Manager のバージョン :
 - CUCM バージョン 8.6.1.10000-43 以降。
 - サポートされているエンドポイント : MX200、EX シリーズ (EX90、EX60)、Quick Set C20、Codec C シリーズ (C90、C60、C40)、および Codec C シリーズを使用する Profile。
 - CUCM バージョン 8.6.2 以降。
 - サポートされているエンドポイント : SX20 Quick Set、MX シリーズ (MX300、MX200)、EX シリーズ (EX90、EX60)、Quick Set C20、Codec C シリーズ (C90、C60、C40)、および Codec C シリーズを使用する Profile。
 - 8.6.2.21020 より前のバージョンを使用している場合は、MX300 と SX20 をサポートするために、2011 年 12 月以降の CUCM デバイス パックが必要です。
 - CTS Manager に対して CTI モニタリングのサポートをイネーブルにするには、CUCM バージョン 8.6.2 以降を使用します。
- CTMS バージョン 1.8 以降。
- CTS-MAN バージョン 1.8 以降。
- Cisco TelePresence TC のバージョン :
 - TC 5.0 以降
 - MX シリーズ (MX300、MX200)、EX シリーズ (EX90、EX60)、Quick Set C20、Codec C シリーズ (C90、C60、C40)、および Codec C シリーズを使用する Profile。
 - TC 5.1 以降
 - SX20 Quick Set、MX シリーズ (MX300、MX200)、EX シリーズ (EX90、EX60)、Quick Set C20、Codec C シリーズ (C90、C60、C40)、および Codec C シリーズを使用する Profile。
 - C20 が CTMS と相互運用するには、高品位解像度オプションが必要です。

システムを TMS から CUCM へ移行する場合

エンドポイントを TMS から CUCM へ移行する場合は、TMS からエンドポイントを削除して、TMS が自動的にデバイスを検出する機能をディセーブルにします。

第 2 章

TelePresence のエンドポイントの設定

TelePresence のエンドポイントの設定の概要

TelePresence のエンドポイントの設定は、3 つのステップで行います。

ステップ 1

必要な場合は、次の手順を実行してください。

TelePresence のエンドポイントを出荷時の初期状態にリセットする

TMS または類似のシステムでコーデックが使用されている場合は、最初に出荷時の初期状態へのリセットを行う必要があります。コーデックが新規または使用されていない場合は、出荷時の初期状態へのリセットを行う必要はありません。コーデックを出荷時の初期状態にリセットすると、その後、コーデックが自動的にリポートされます。コールのログは削除され、システム パラメータはすべてデフォルト値にリセットされます。コーデックにアップロードされていたファイルは、すべて削除されます。リリース キーやオプション キーは影響を受けません。

エンドポイントを TMS から CUCM へ移行する場合は、TMS からエンドポイントを削除して、TMS が自動的にデバイスを検出する機能をディセーブルにします。

エンドポイントを出荷時の初期状態にリセットするには、次のいずれかの方法を実行してください。

タッチ
インターフェイス



[詳細](#)

API コマンド



[詳細](#)

ステップ 2

プロビジョニング モードの設定

次のいずれかの方法を選択して、プロビジョニング モードを設定します。

タッチ インターフェイス



[詳細](#)

OSD/ リモート
コントロール



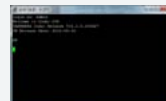
[詳細](#)

Web インターフェイス



[詳細](#)

API コマンド



[詳細](#)

ステップ 3

標準帯域の設定

次のいずれかの方法を選択して、標準帯域を設定します。

タッチ インターフェイス



[詳細](#)

OSD/ リモート
コントロール



[詳細](#)

Web インターフェイス



[詳細](#)

API コマンド



[詳細](#)

タッチ インターフェイスを使用して TelePresence のエンドポイントを出荷時の初 期状態にリセットする

注： TMS または類似のシステムでコーデックが使用されている場合は、最初に出荷時の初期状態へのリセットを行う必要があります。コーデックが新規または使用されていない場合は、出荷時の初期状態へのリセットを行う必要はありません。コーデックを出荷時の初期状態にリセットすると、その後、コーデックが自動的にリポートされます。コールのログは削除され、システム パラメータはすべてデフォルト値にリセットされます。コーデックにアップロードされていたファイルは、すべて削除されます。リリース キーやオプション キーは影響を受けません。

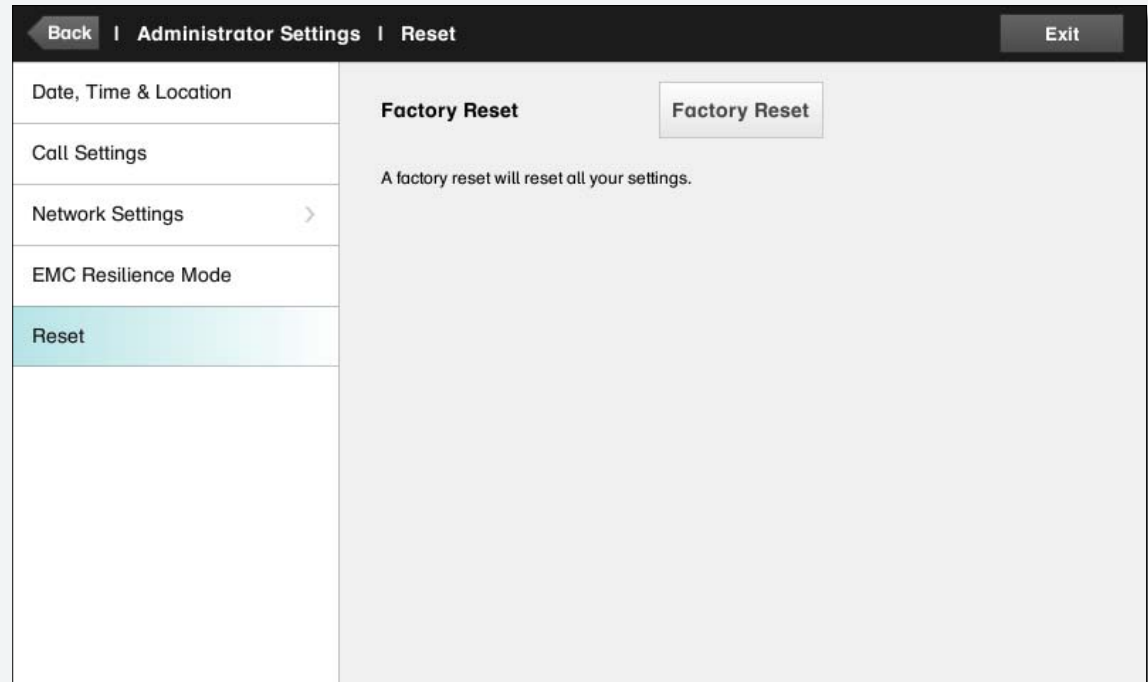
必要な場合は、次の手順を実行してください。

エンドポイントを出荷時の初期状態にリセットする

- 1 装置がスリープ モードになっている場合は、タッチ パネルを静かに叩いて、タッチ インターフェイスを復帰させます。
- 2 [その他 (More)] を選択します。
- 3 [設定 (Settings)] を選択します。
- 4 [管理者設定 (Administrator Settings)] を選択します。
- 5 [リセット (Reset)] を選択し、[初期設定へのリセット (Factory Reset)] ボタンを押します。
- 6 コーデックが自動的にリポートし、出荷時の初期状態に戻ります。これには数分かかることがあります。
- 7 出荷時の初期状態に戻った後、**プロビジョニング ウィザード**が自動的に起動します。

[概要に戻る](#)

ステップ 1 (必要な場合)



タッチ インターフェイスを使用してプロビジョニング モードを設定する

プロビジョニング モードの設定

出荷時の初期状態にリセットした後、プロビジョニング ウィザードが自動的に起動しない場合は、手動で起動させることができます。

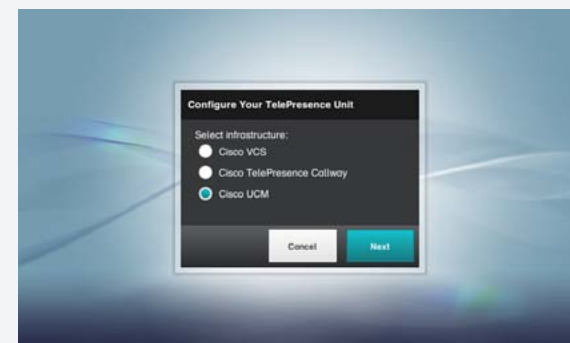
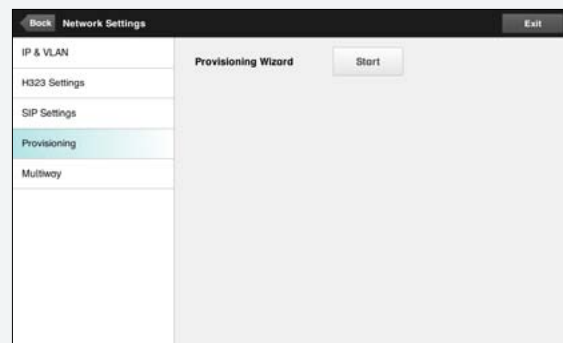
- 1 [その他 (More)] を選択します。
- 2 [設定 (Settings)] を選択します。
- 3 [ネットワーク設定 (Network Settings)] を選択します。
- 4 [プロビジョニング (Provisioning)] を選択します。
- 5 プロビジョニング ウィザードを起動します。

プロビジョニング ウィザードの説明に従います。

- 1 インフラストラクチャを [Cisco UCM] に設定して、[次へ (Next)] を選択します。
- 2 プロビジョニング ウィザードで、Cisco UCM TFTP サーバの外部マネージャのアドレスを入力するよう求められます。
注： Cisco UCM に設定すると、CDP がイネーブルになります。CDP に問題がなければ、エンドポイントによって DHCP オプション 150 が検出されます。この場合は、[外部マネージャ (External Manager)] のアドレス フィールドを空白のままにして、ステップ 3 に進むことができます。このネットワークで DHCP オプション 150 が提供されていない場合は、アドレスを追加する必要があります。ただし、フィールドに手動で入力すると、DHCP で割り当てられた設定は上書きされます。
- 3 [登録 (Register)] を選択して、Cisco UCM の登録を開始します。

概要に戻る

ステップ 2



タッチ インターフェイスを使用して標準帯域を設定する

プロビジョニング モードの設定

- 1 [その他 (More)] を選択します。
- 2 [設定 (Settings)] を選択します。
- 3 [管理者設定 (Administrator Settings)] を選択します。
- 4 [通話設定 (Call Settings)] を選択して、[標準帯域 (Default Call Rate)] を設定します。

注： CTMS を使用する導入の場合、推奨値は 2500 kbps 以上です。

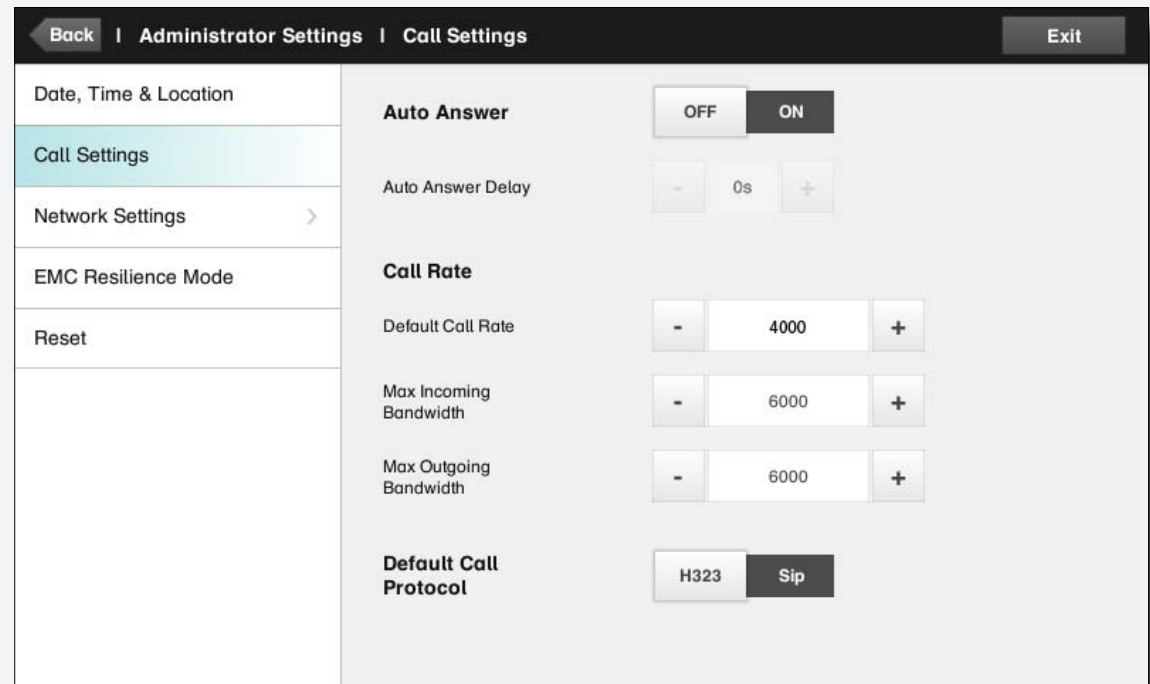
自動応答の設定について

UC Manager Administration でプロビジョニングされている自動応答の設定は、エンドポイントでは無視されるので、エンドポイント自体で設定する必要があります。

標準通信プロトコルの設定について

CUCM モードでは、標準プロトコルは SIP に自動的に設定され、H.323 はサポートされません。

ステップ 3



The screenshot shows the 'Call Settings' configuration page. The left sidebar contains a menu with 'Date, Time & Location', 'Call Settings' (highlighted), 'Network Settings', 'EMC Resilience Mode', and 'Reset'. The main content area is titled 'Call Settings' and includes the following options:

- Auto Answer:** A toggle switch set to 'ON'.
- Auto Answer Delay:** A numeric input field set to '0s'.
- Call Rate:** A section with three numeric input fields:
 - Default Call Rate:** Set to '4000'.
 - Max Incoming Bandwidth:** Set to '6000'.
 - Max Outgoing Bandwidth:** Set to '6000'.
- Default Call Protocol:** A toggle switch set to 'Sip'.

各設定を選択した場合にどのように表示されるかに注意してください。この例では、[自動応答 (Auto Answer)] が [オン (On)]、[標準通信プロトコル (Default Call Protocol)] が [SIP] に設定されています。

[概要に戻る](#)

OSD/ リモート コントロールを使用してプロビジョニング モードを設定する

プロビジョニング モードの設定

- 1 TMS または類似のシステムでコーデックが使用されている場合は、最初に出荷時の初期状態へのリセットを行う必要があります。「API/CLI コマンドを使用して TelePresence のエンドポイントを出荷時の初期状態にリセットする」(p.14) を参照してください。コーデックが新規または使用されていない場合は、出荷時の初期状態へのリセットを行う必要はありません。
エンドポイントを TMS から CUCM へ移行する場合は、TMS からエンドポイントを削除して、TMS が自動的にデバイスを検出する機能をディセーブルにします。
- 2 システムがスリープ モードになっている場合は、リモート コントロールのいずれかのキーを押して、システムを復帰させます。
- 3 [ホーム (Home)] を選択します。
- 4 [設定 (Settings)] を選択します。
- 5 [管理者設定 (Administrator Settings)] を選択します。
- 6 [詳細設定 (Advanced Configuration)] を選択します。
- 7 [プロビジョニング (Provisioning)] を選択し、プロビジョニングの [モード (Mode)] を [CUCM] に設定します。
- 8 この変更はただちに有効になります。

注: CDP がイネーブルになり、問題がなければ、エンドポイントによって DHCP オプション 150 が検出されます。このネットワークで DHCP オプション 150 が提供されていない場合は、外部マネージャの IP アドレスを手動で追加する必要があります。

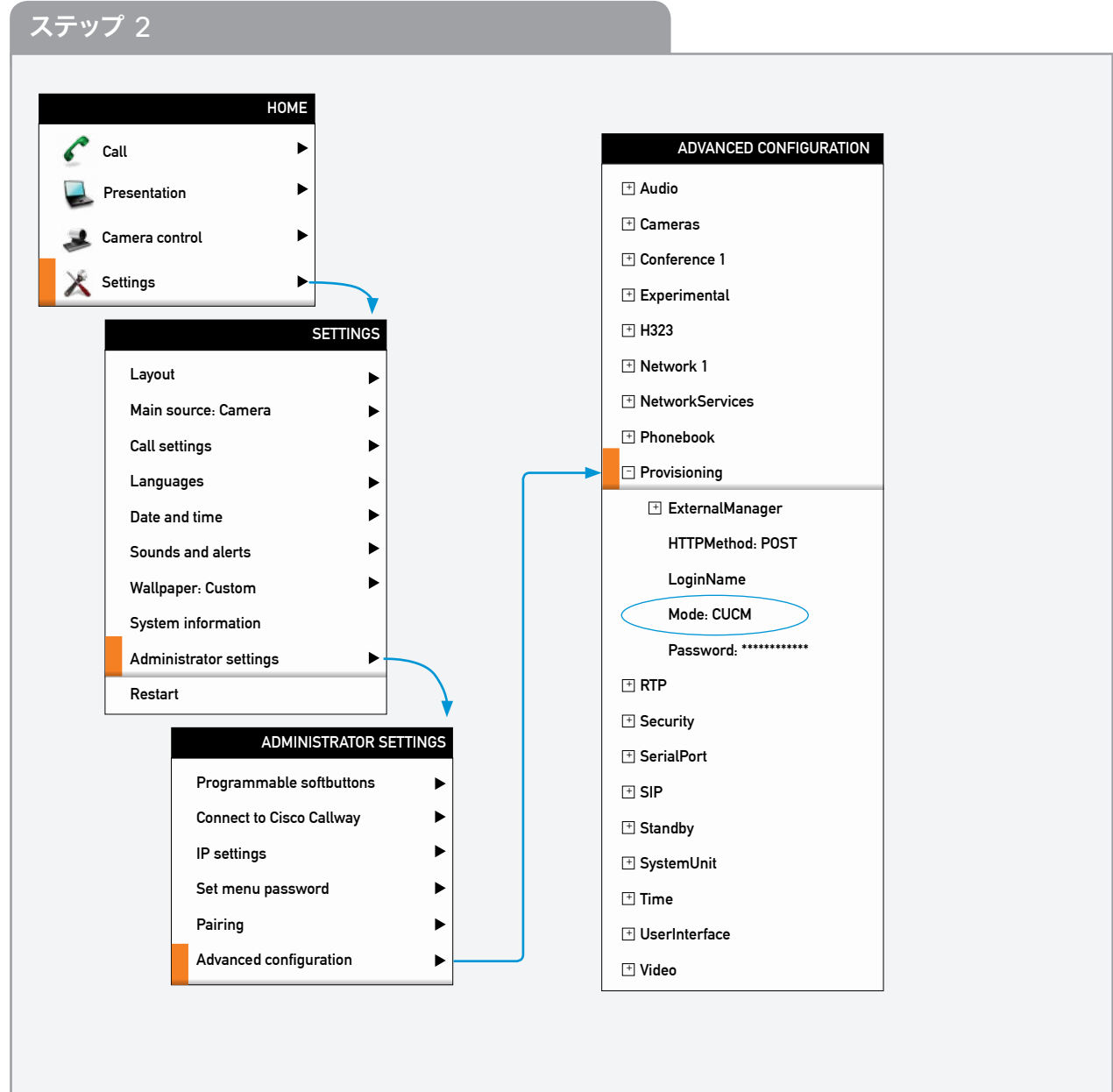
以前のリリースから TC5.x へのアップグレード

以前のリリースから TC5.x へアップグレードすると、Network 1 VLAN Voice Mode パラメータの値が変更されます。Network 1 VLAN Voice Mode を Auto に設定します。

[詳細](#)

[概要に戻る](#)

ステップ 2



HOME

- Call
- Presentation
- Camera control
- Settings

SETTINGS

- Layout
- Main source: Camera
- Call settings
- Languages
- Date and time
- Sounds and alerts
- Wallpaper: Custom
- System information
- Administrator settings
- Restart

ADMINISTRATOR SETTINGS

- Programmable softbuttons
- Connect to Cisco Callway
- IP settings
- Set menu password
- Pairing
- Advanced configuration

ADVANCED CONFIGURATION

- Audio
- Cameras
- Conference 1
- Experimental
- H323
- Network 1
- NetworkServices
- Phonebook
- Provisioning
 - ExternalManager
 - HTTPMethod: POST
 - LoginName
 - Mode: CUCM
 - Password: *****
- RTP
- Security
- SerialPort
- SIP
- Standby
- SystemUnit
- Time
- UserInterface
- Video

OSD/ リモート コントロールを使用して標準帯域を設定する

標準帯域の設定

- 1 システムがスリープ モードになっている場合は、リモート コントロールのいずれかのキーを押して、システムを復帰させます。
- 2 [ホーム (Home)] を選択します。
- 3 [設定 (Settings)] を選択します。
- 4 [管理者設定 (Administrator Settings)] を選択します。
- 5 [詳細設定 (Advanced Configuration)] を選択します。
- 6 [会議 (Conference)] を選択します。
- 7 [標準通信 (DefaultCall)] を選択し、[帯域 (Rate)] に適切な値 (kbps) を設定します。
注：CTMS を使用する導入の場合、推奨値は 2500 kbps 以上です。
- 8 この変更はただちに有効になります。

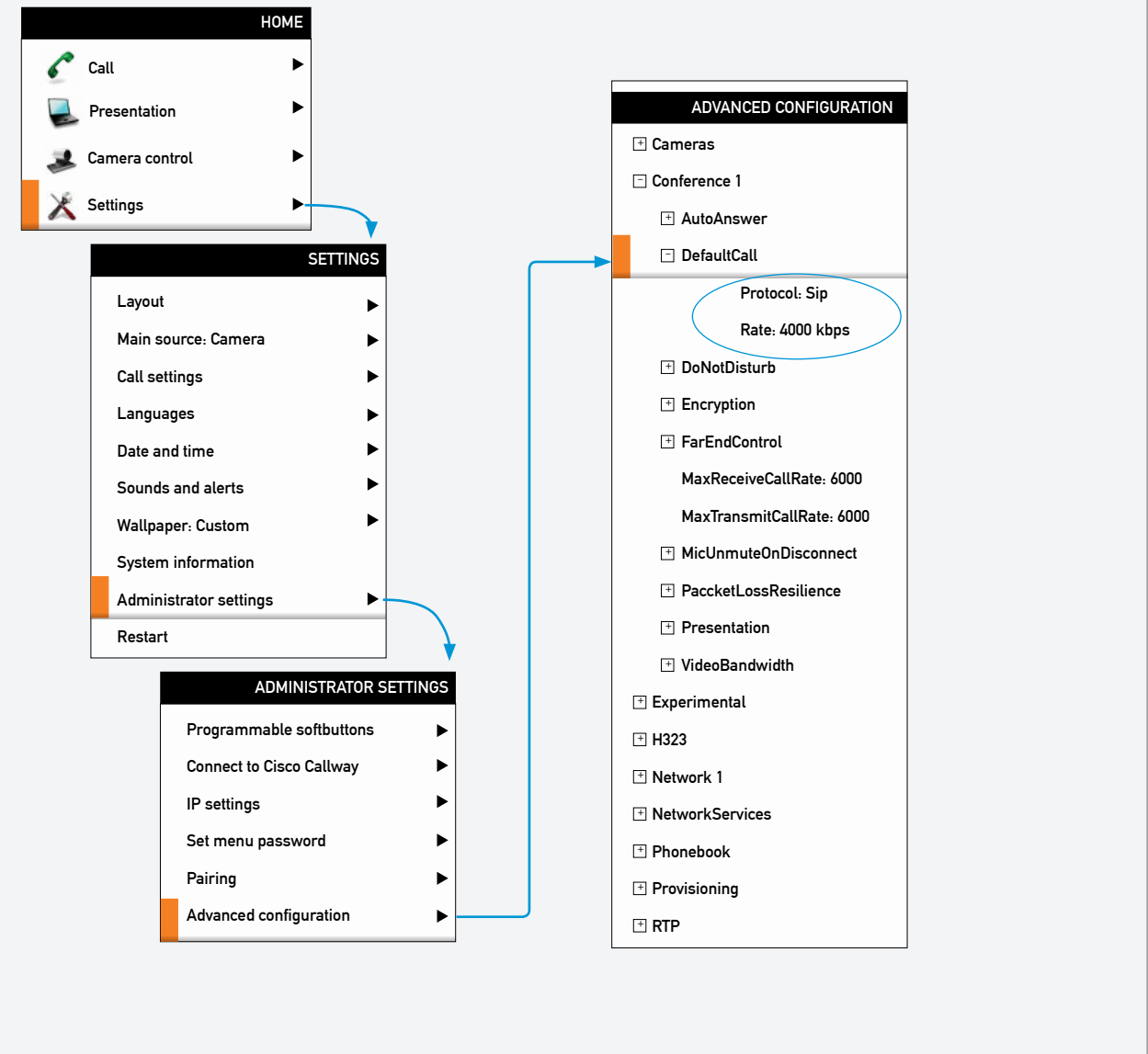
自動応答の設定について

UC Manager Administration でプロビジョニングされている自動応答の設定は、エンドポイントでは無視されるので、エンドポイント自体で設定する必要があります。

標準通信プロトコルの設定について

CUCM モードでは、標準プロトコルは SIP に自動的に設定され、H.323 はサポートされません。

ステップ 3



The screenshot illustrates the configuration steps for setting the standard bandwidth. It shows three overlapping menu screens:

- HOME**: Contains 'Call', 'Presentation', 'Camera control', and 'Settings'.
- SETTINGS**: Contains 'Layout', 'Main source: Camera', 'Call settings', 'Languages', 'Date and time', 'Sounds and alerts', 'Wallpaper: Custom', 'System information', 'Administrator settings', and 'Restart'.
- ADMINISTRATOR SETTINGS**: Contains 'Programmable softbuttons', 'Connect to Cisco Callway', 'IP settings', 'Set menu password', 'Pairing', and 'Advanced configuration'.
- ADVANCED CONFIGURATION**: Contains 'Cameras', 'Conference 1', 'AutoAnswer', 'DefaultCall', 'Protocol: Sip', 'Rate: 4000 kbps', 'DoNotDisturb', 'Encryption', 'FarEndControl', 'MaxReceiveCallRate: 6000', 'MaxTransmitCallRate: 6000', 'MicUnmuteOnDisconnect', 'PacketLossResilience', 'Presentation', 'VideoBandwidth', 'Experimental', 'H323', 'Network 1', 'NetworkServices', 'Phonebook', 'Provisioning', and 'RTP'.

Blue arrows indicate the navigation path from HOME to SETTINGS, then to ADMINISTRATOR SETTINGS, then to ADVANCED CONFIGURATION, and finally to the 'Protocol: Sip' and 'Rate: 4000 kbps' options, which are circled in red.

[概要に戻る](#)

Web インターフェイスを使用してプロビジョニング モードを設定する

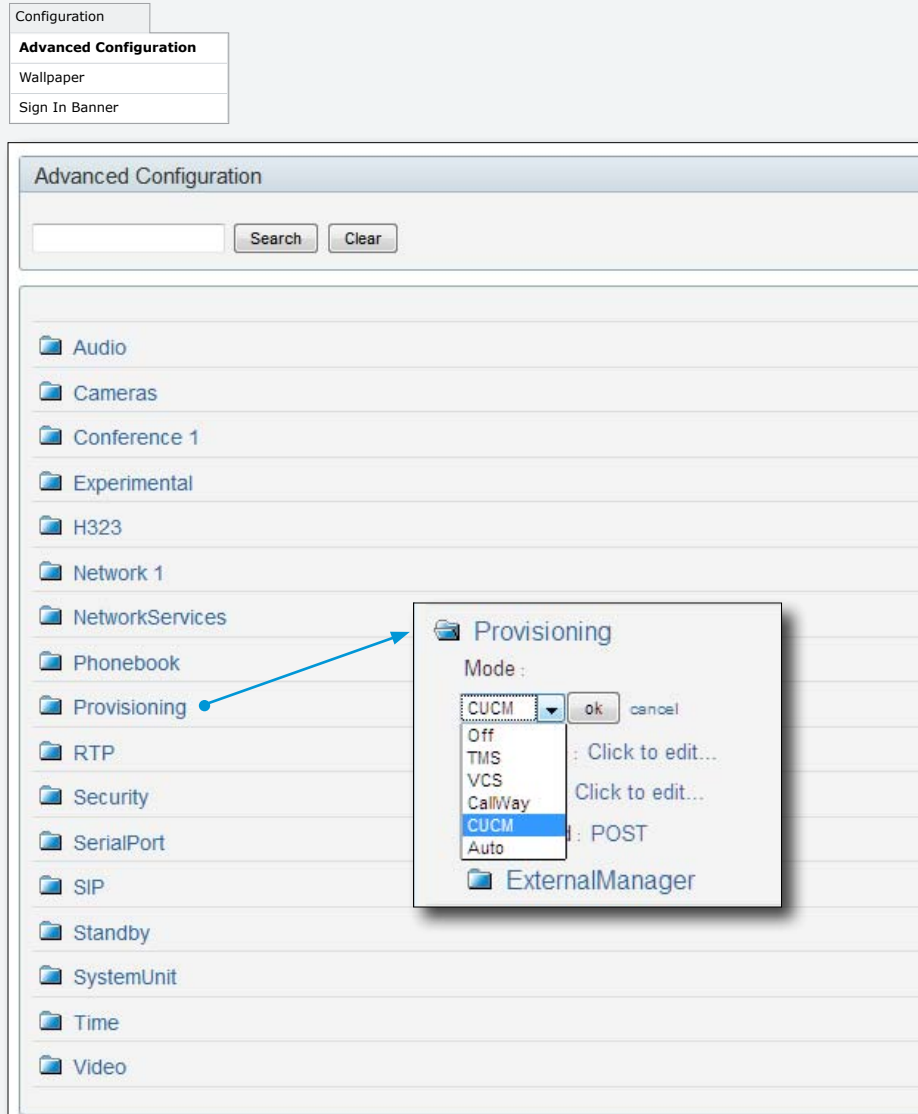
プロビジョニング モードの設定

- 1 TMS または類似のシステムでコーデックが使用されている場合は、最初に出荷時の初期状態へのリセットを行う必要があります。「API/CLI コマンドを使用して TelePresence のエンドポイントを出荷時の初期状態にリセットする」(p.14) を参照してください。コーデックが新規または使用されていない場合は、出荷時の初期状態へのリセットを行う必要はありません。
エンドポイントを TMS から CUCM へ移行する場合は、TMS からエンドポイントを削除して、TMS が自動的にデバイスを検出する機能をディセーブルにします。
- 2 Web ブラウザを開き、IP アドレスを入力してビデオ システムに接続します。ユーザ名を入力します。パスワードが設定されている場合は、パスワードを入力します。
- 3 上部のメニューから [設定 (Configuration)] を選択します。
- 4 ドロップダウン リストから [詳細設定 (Advanced Configuration)] を選択します。
- 5 [プロビジョニング (Provisioning)] を選択し、プロビジョニングの [モード (Mode)] を [CUCM] に設定します。
- 6 [OK] ボタンを押して、変更を確定します。

注: CDP がイネーブルになり、問題がなければ、エンドポイントによって DHCP オプション 150 が検出されます。このネットワークで DHCP オプション 150 が提供されていない場合は、外部マネージャの IP アドレスを手動で追加する必要があります。

[概要に戻る](#)

ステップ 2



The screenshot shows the 'Advanced Configuration' page in the Cisco Unified Communications Manager Web Interface. The left sidebar contains a tree view of configuration folders, with 'Provisioning' selected. A modal dialog box titled 'Advanced Configuration' is open, showing the 'Mode' dropdown menu set to 'CUCM'. The dialog also includes 'ok' and 'cancel' buttons, and a list of other modes: Off, TMS, VCS, CallWay, CUCM (selected), and Auto. The 'CUCM' mode is associated with the action ': POST'.

Web インターフェイスを使用して標準帯域を設定する

標準帯域の設定

- 1 まだログインしていない場合は Web ブラウザを開き、IP アドレスを入力してビデオ システムに接続します。ユーザ名を入力します。パスワードが設定されている場合は、パスワードを入力します。
- 2 上部のメニューから [設定 (Configuration)] を選択します。
- 3 ドロップダウン リストから [詳細設定 (Advanced Configuration)] を選択します。
- 4 [会議 1 (Conference 1)] を選択します。
- 5 [標準通信 (DefaultCall)] を選択し、[帯域 (Rate)] に適切な値 (kbps) を設定します。
注: CTMS を使用する導入の場合、推奨値は 2500 kbps 以上です。
- 6 [OK] ボタンを押して、変更を確認します。

自動応答の設定について

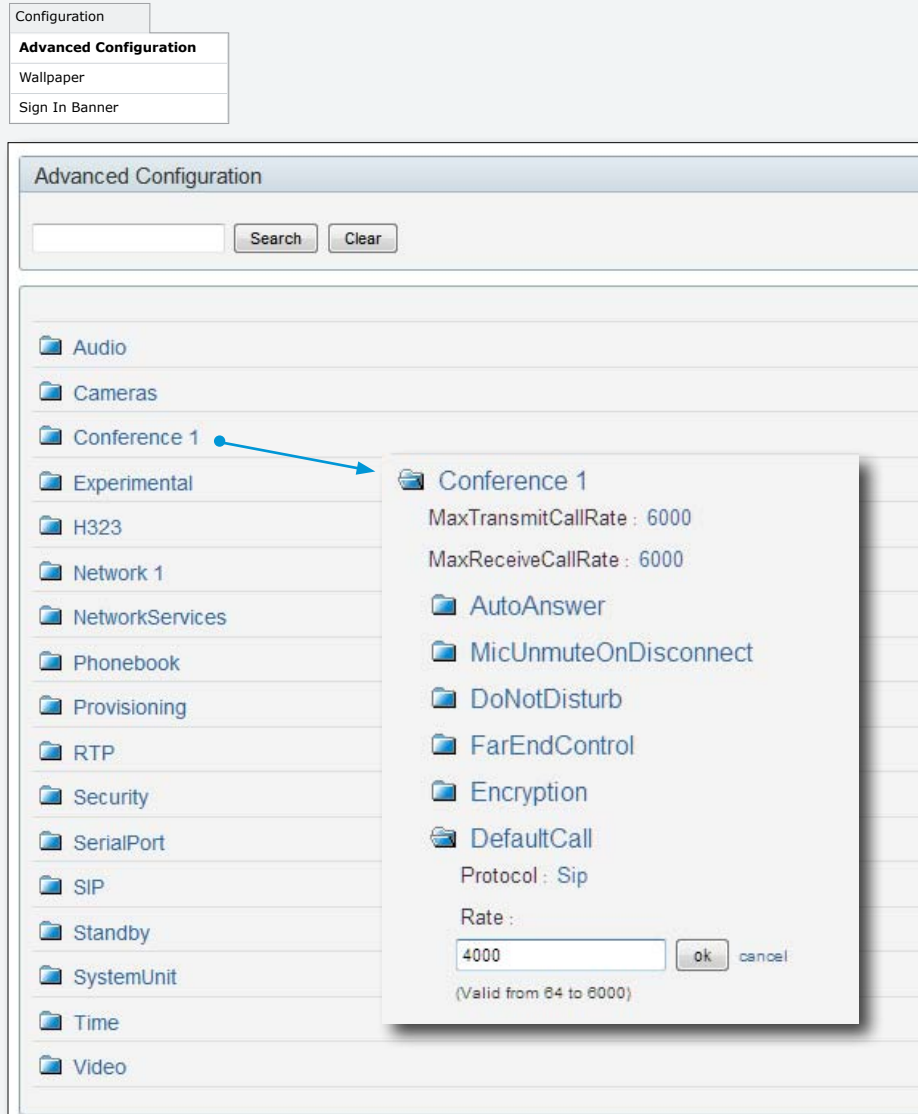
UC Manager Administration でプロビジョニングされている自動応答の設定は、エンドポイントでは無視されるので、エンドポイント自体で設定する必要があります。

標準通信プロトコルの設定について

CUCM モードでは、標準プロトコルは SIP に自動的に設定され、H.323 はサポートされません。

[概要に戻る](#)

ステップ 3



The screenshot shows the 'Advanced Configuration' page in the Cisco Unified Communications Manager Web Interface. The left sidebar contains a list of configuration categories: Configuration, Advanced Configuration, Wallpaper, and Sign In Banner. The main content area is titled 'Advanced Configuration' and includes a search bar with 'Search' and 'Clear' buttons. Below the search bar is a list of configuration categories: Audio, Cameras, Conference 1, Experimental, H323, Network 1, NetworkServices, Phonebook, Provisioning, RTP, Security, SerialPort, SIP, Standby, SystemUnit, Time, and Video. A blue arrow points from 'Conference 1' in the sidebar to a pop-up window titled 'Conference 1'. This window displays the following settings: MaxTransmitCallRate: 6000, MaxReceiveCallRate: 6000, AutoAnswer, MicUnmuteOnDisconnect, DoNotDisturb, FarEndControl, Encryption, and DefaultCall. Under 'DefaultCall', the 'Protocol' is set to 'Sip' and the 'Rate' is set to '4000' in a text input field. Below the input field, it says '(Valid from 64 to 6000)'. There are 'ok' and 'cancel' buttons at the bottom right of the pop-up window.

API/CLI コマンドを使用して TelePresence のエンドポイントを出荷時の初期状態にリセットする

コマンドライン インターフェイスから次の API コマンドを使用して、コーデックを出荷時の初期状態にリセットできます。API コマンドの詳細については、Cisco の [Web サイト](#)にあるコーデックの API ガイドを参照してください。

注： TMS または類似のシステムでコーデックが使用されている場合は、最初に出荷時の初期状態へのリセットを行う必要があります。コーデックが新規または使用されていない場合は、出荷時の初期状態へのリセットを行う必要はありません。

[xCommand SystemUnit FactoryReset Confirm](#)

コーデックを出荷時の初期状態にリセットすると、その後、コーデックが自動的にリポートされます。コールのログは削除され、システム パラメータはすべてデフォルト値にリセットされます。コーデックにアップロードされていたファイルは、すべて削除されます。リリース キーやオプション キーは影響を受けません。

[概要に戻る](#)

ステップ 1 (必要な場合)

例：

```
xCommand SystemUnit FactoryReset Confirm: Yes
*r FactoryResetConfirmResult (status=OK):
** end
```

API/CLI コマンドを使用してプロビジョニングを設定する

コマンドライン インターフェイスから次の API コマンドを使用して、プロビジョニングを設定できます。API コマンドの詳細については、[Cisco の Web サイト](#)にあるコーテックの API ガイドを参照してください。

xConfiguration Provisioning Mode

外部マネージャ / 管理システムでエンドポイントを管理できるようにします。CUCM (Cisco Unified Communications Manager) に設定すると、エンドポイントは CUCM への登録を試みます。

xConfiguration Provisioning ExternalManager Address

Cisco UCM クラスタの TFTP サーバの外部マネージャに IP アドレスを入力します。

注： CDP がイネーブルになり、問題がなければ、エンドポイントによって DHCP オプション 150 が検出されます。このネットワークで DHCP オプション 150 が提供されていない場合は、外部マネージャの IP アドレスを手動で追加する必要があります。

xConfiguration Provisioning ExternalManager Protocol

セキュア管理を使用するかどうかを決定します。セキュア管理をディセーブルにするには HTTP に設定します。HTTP は xConfiguration NetworkServices HTTP Mode の設定でイネーブルにする必要があります。

[概要に戻る](#)

ステップ 2

例：

```
xConfiguration Provisioning Mode: (CUCM にする必要があります)
xConfiguration Provisioning ExternalManager Address: (CUCM クラスタの TFTP サーバのアドレス)
xConfiguration Provisioning ExternalManager Protocol: (UCM モードの場合は HTTP にする必要があります)
xConfiguration Provisioning LoginName: (空白のままにします。UCM モードの場合は不要です)
xConfiguration Provisioning Password: (空白のままにします。UCM モードの場合は不要です)
xConfiguration Provisioning HttpMethod: (UCM モードの場合は GET と POST のいずれも動作します)
xConfiguration Provisioning ExternalManager Path: (空白のままにします。UCM モードの場合は不要です)
xConfiguration Provisioning ExternalManager Domain: (空白のままにします。UCM モードの場合は不要です)
```

API/CLI コマンドを使用して通話を設定する

コマンドライン インターフェイスから次の API コマンドを使用して、通話を設定できます。API コマンドの詳細については、Cisco の Web サイトにあるコーデックの API ガイドを参照してください。

[xConfiguration Conference \[1..1\] DefaultCall Rate](#)

標準帯域を設定します。64 ~ 6000 kbps の値を選択します。CTMS を使用する導入の場合、推奨値は 2500 kbps 以上です。

[xConfiguration Conference \[1..1\] DefaultCall Protocol](#)

CUCM モードでは、標準プロトコルは SIP に自動的に設定され、H.323 はサポートされません。右は、標準プロトコルが自動的に設定されない場合の例を示しています。

[xConfiguration Conference \[1..1\] AutoAnswer](#)

UC Manager Administration でプロビジョニングされている自動応答の設定は、エンドポイントでは無視されるので、エンドポイント自体で設定する必要があります。

[概要に戻る](#)

ステップ 3

例：

```
xConfiguration Conference 1 DefaultCall Rate: <0..6000> (推奨値は 2500 kbps 以上)
xConfiguration Conference 1 DefaultCall Protocol: (UCM モードの場合は SIP)
xConfiguration Conference 1 AutoAnswer Mode: <On/Off> (エンドポイントでローカルに設定する必要があります)
xConfiguration Conference 1 AutoAnswer Mute: <On/Off> (エンドポイントでローカルに設定する必要があります)
xConfiguration Conference 1 AutoAnswer Delay: <0..50> (エンドポイントでローカルに設定する必要があります)
```


第 3 章

CUCM の設定

Cisco Unified Communications Manager 8.6 の設定

1 エンドポイントを TMS から CUCM へ移行する場合は、TMS からエンドポイントを削除して、TMS が自動的にデバイスを検出する機能をディセーブルにします。

2 ドロップダウン リストからのエンドポイント モデルの選択

[Cisco TelePresence EX]、[Cisco TelePresence MX]、[Cisco TelePresence SX]、[Cisco TelePresence Profile]、[Cisco TelePresence Cx0] のいずれかのモデルを選択します。

3 CUCM 登録モードの設定

[UCM 管理 (UCM Administration)] に移動します。

自動登録をイネーブルにするか、手動でエンドポイントに MAC アドレスを設定します。

4 SIP プロファイルの設定

[UCM 管理 (UCM Administration)] > [デバイス (Device)] > [デバイスの設定 (Device Settings)] > [SIP プロファイル (SIP Profile)] に移動します。

新しい SIP プロファイルを作成します。

ヒント：既存の標準 SIP プロファイルをコピーして、新しいプロファイルを作ることができます。

- すべてのコールの転送を行うため、[アプリケーションによるリダイレクト (Redirect by Application)] をイネーブルにします。
- [アーリー オファーおよび再招待の SDP セッションレベル帯域幅修飾子 (SDP Session-level Bandwidth Modifier for Early Offer and Re-invites)] を [TIAS] および [AS] に設定します。
- [SIP 要求で完全修飾ドメイン名を使用 (Use Fully Qualified Domain Name in SIP Requests)] をイネーブルにします。
- まだ設定されていない場合は、[BFCP を使用するプレゼンテーション共有を許可 (Allow Presentation Sharing using BFCP)] をイネーブルにします。

この SIP プロファイルを、MX、EX、SX、および C シリーズのすべてのエンドポイントに割り当てます。

5 組織の上位レベルのドメインの設定

[UCM 管理 (UCM Administration)] > [システム (System)] > [エンタープライズパラメータ (Enterprise Parameters)] に移動します。

[組織の上位レベルのドメイン (Organizational Top Level Domain)] に cisco.com などを設定します。

6 リージョンとロケーションの設定

[UCM 管理 (UCM Administration)] > [システムのリージョン (System Region)] または [システムのロケーション (System Location)] に移動します。

[リージョン (Regions)] および [ロケーション (Locations)] に適切な帯域幅を許可するよう設定します。

- 128 kbps (AAC-LD (LATM))。
- 4000 kbps ビデオ。注：CTMS を使用する導入の場合は、2500 kbps 以上を推奨します。
- マルチサイト対応の装置の場合は、ロケーション設定に同時通話の最大数を反映する必要があります。

7 コーリング サーチ スペース、パーティション、およびプレゼンス権限の設定

[UCM 管理 (UCM Administration)] に移動します。

必要に応じてデバイスにコーリング サーチ スペース、パーティション、およびプレゼンス権限を割り当てます。MX、EX、SX、および C シリーズのエンドポイントの場合は、適切な転送を設定します。CUCM の設定の詳細については、対応する『Cisco Unified Communications SRND』を参照してください。

8 DCSP パラメータの設定

[UCM 管理 (UCM Administration)] に移動します。

使用するネットワークに応じて、DSCP のパラメータを設定します。デフォルトの値は次のとおりです。

- 電話をベースとするサービスの場合の DSCP：デフォルトの DSCP 000000
- 電話の設定の場合の DSCP：CS3 (優先順位 3) の DSCP (011000)
- UCM とデバイスとのインターフェイスの場合の DSCP：CS3 (優先順位 3) の DSCP (011000)
- 音声コールの場合の DSCP：EF DSCP (101110)
- ビデオ コールの場合の DSCP：AF41 DSCP (100010)
- TelePresence コールの場合の DSCP：CS4 (優先順位 4) の DSCP (100000)

9 エンドポイントへの NTP リファレンスの設定

[UCM 管理 (UCM Administration)] > [システム (System)] > [NTP リファレンス (NTP Reference)] に移動します。

エンドポイントに電話用 NTP リファレンスを設定します。

- NTP リファレンスはユニキャスト モードである必要があります。
- [日時グループ (Date/Time Group)] を割り当てます。[日時グループ (Date/Time Group)] は次に [デバイスプール (Device Pool)] に割り当てられます。

10 UCM サービスの設定

[Cisco Unified Serviceability] > [ツール (Tools)] > [サービスの開始 (Service Activation)] を選択します。

必要な UCM サービスをイネーブルにします。

- Cisco CallManager

- Cisco IP Voice Media Streaming App
- Cisco User Data Services (エンドポイントを登録するノードでイネーブルになっている必要があります)。MX、EX、SX、および C シリーズのエンドポイントでは、これをアドレス帳として使用します。
- Cisco Tftp
- その他 (必要に応じて)。

Cisco Unified Communications Manager の相互運用の設定

CTMS を使用して導入する場合は、CTMS を相互運用モードで設定してください。CTMS 1.8 のマニュアルを参照してください。

プロダクト固有の設定

プロダクト固有の設定を設定します。

```
[UCM 管理 (UCM Administration) ] > [ デバイス (Device) ] > [ 電話 (Phone) ] > (選択したエンドポイント) > [ プロダクト固有の設定 (Product Specific Configuration) ] セクションに移動します。
```

会議室名 (Exchange(R)) (Room Name (from Exchange(R))) :

これは Exchange の会議室名です。この TelePresence システムが参加する会議をスケジュールするために使用します。(注: この設定は Exchange で使用している電子メール アドレスと同一である必要があります。たとえば、room123@cisco.com)。

- 最大長: 64

Web アクセス (Web Access) :

このパラメータは、デバイスが Web ブラウザまたはその他の HTTP クライアントからの接続を受け入れるかどうかを示します。デバイスの Web サーバ機能をディセーブルにすると、電話の内部 Web ページや一部のサポート機能へのアクセスがブロックされますが、通常の動作には影響しません。このパラメータを有効にするには、デバイスのリセットが必要です。

- デフォルト: ディセーブル

注: この Web アクセス設定の変更を有効にするには、デバイスに対して [保存 (Save)] および [リセット (RESET)] を実行する必要があります ([再起動 (Restart)] や [設定の適用 (Apply Config)] ではありません)。

SSH アクセス (SSH Access) :

このパラメータは、デバイスが SSH 接続を受け入れるかどうかを示します。デバイスの SSH サーバ機能をディセーブルにすると、ログ ファイルの収集などの特定のサポート機能がブロックされますが、通常の操作には影響しません。

- デフォルト: ディセーブル

標準通信プロトコル (Default Call Protocol) :

このパラメータでは、デバイスの標準通信プロトコルを設定します。Cisco Unified Communications Manager に登録する場合、このデバイスは SIP だけをサポートします。

- デフォルト: SIP

Quality Improvement Server :

デバイスから品質向上レポートを収集するリモート システムのホスト名または IP アドレスを指定します。

- デフォルト: ""
- 最大長: 256

管理者のユーザ名とパスワード

ユーザ名とパスワードを設定します。これは CTS-Manager がエンドポイントを検出し、これに [ワンボタン (One Button to Push)] スケジュールを付与するために必要です。

管理者ユーザ名 (Admin Username) :

管理者ユーザのユーザ ID を入力します。

- デフォルト: admin
- 最大長: 64
- 指定できる値: apache、daemon、nobody、root、shutdown という文字列は管理者ユーザ名に使用できません。長さは 1 ~ 64 文字にする必要があります。

管理者パスワード (Admin Password) :

管理者ユーザのパスワードを入力します。

- デフォルト: ""
- 最大長: 64
- 指定できる値: 管理者パスワードには、ASCII 文字コードの印刷可能な文字 (空白を除く) しか使用できません。

注: ユーザ名とパスワードは装置には送られません。自分自身で設定する必要があります。

ダイヤル プラン

ダイヤル プランを設定します。詳細については、CTS-Manager のマニュアルを参照してください。

電話番号

電話番号を設定します。詳細については、CTS-Manager のマニュアルを参照してください。

第 4 章

付録

パスワードによるエンドポイントの管理

システムの Web インターフェイスやコマンドライン インターフェイスにサインインするには、ユーザ名とパスワードが必要です。

TelePresence システムのデフォルトのユーザ アカウントは、ユーザ名が `admin` で、パスワードは設定されていません。このユーザにはシステムへのフル アクセス権があります。

注: システム設定へのアクセスを制限するために、`admin` ユーザにパスワードを設定することを強く推奨します。

パスワードのコピーを安全な場所に保管してください。パスワードを忘れた場合は、最寄りの Cisco 代理店までお問い合わせください。

注: エンドポイントに設定された管理者パスワードは、UC Manager の [プロダクト固有の設定 (Product Specific Configuration Layout)] に設定されている値と同一である必要があります。これは、CTS-Manager がエンドポイントを検出し、そのエンドポイントに [ワンボタン (One Button to Push)] スケジュールを付与するために必要であるからです。これは手動で行う必要があります。

システム パスワードの変更

システム パスワードを変更するには、次の手順に従います。

パスワードが現在設定されていない場合は、[現在のパスワード (Current password)] を空白の状態で使用します。パスワードを削除するには、[新しいパスワード (New password)] フィールドを空白のままにします。

- 1 ユーザ名と現在のパスワードを使用して Web インターフェイスにサインインします。
- 2 [メンテナンス (Maintenance)] タブに移動し、[パスワード変更 (Change Password)] を選択します。
- 3 [現在のパスワード (Current password)] と [新しいパスワード (New password)] の入力フィールドにそれぞれパスワードを入力後、新しいパスワードを再入力します。
パスワードの形式は、0 ~ 64 文字の文字列です。
- 4 [パスワード変更 (Change Password)] をクリックします。

他のユーザのシステム パスワードの変更

他のユーザのアカウント作成の詳細については、「[User management](#)」の項を参照してください。

管理者権限を持っている場合は、次の手順を実行して、すべてのユーザのパスワードを変更することができます。

- 1 ユーザ名とパスワードを使用して Web インターフェイスにサインインします。
- 2 [メンテナンス (Maintenance)] タブに移動し、[ユーザ管理 (User administration)] を選択します。
- 3 対象のユーザをリストから選択します。
- 4 新しいパスワードと PIN コードを入力します。
- 5 [保存 (Save)] をクリックします。

[管理者設定 (Administrator Settings)] メニュー パスワードの設定

システムの初期設定では、[管理者設定 (Administrator Settings)] のメニュー パスワードは設定されていません。

注: これらの設定はビデオ会議システムの動作に影響するので、パスワードを設定してタッチ コントローラの [管理者設定 (Administrator Settings)] メニューを保護することを強く推奨します。

[管理者設定 (Administrator Settings)] メニュー パスワードを設定するには、コマンドライン インターフェイスを使用する必要があります。タッチ コントローラ、もしくは Web インターフェイスは使用できません。

[管理者設定 (Administrator Settings)] メニュー パスワードの設定

- 1 コマンドライン インターフェイス (SSH または Telnet) を使用して、ネットワークまたはシリアル データ ポート経由でシステムに接続します。
- 2 次のコマンドを入力します。
`xCommand SystemUnit MenuPassword Set Password: <password>`
パスワードの形式は、0 ~ 255 文字の文字列です。

ルート パスワードの設定

ルート ユーザのパスワードを設定して、ビデオ システムのファイル システムを保護することもできます。ルート ユーザは、デフォルトではディセーブルになっています。ルート ユーザをイネーブルにして、ルートのパスワードを設定するには、コマンドライン インターフェイスを使用する必要があります。

ルート パスワードの設定

ルート ユーザをアクティブにして、パスワードを設定するには、次の手順を実行します。

- 1 コマンドライン インターフェイス (SSH または Telnet) を使用して、ネットワークまたはシリアル データ ポート経由でシステムに接続します。
- 2 ユーザ名とパスワードを使用してシステムにサインインします。このユーザには管理者権限が必要です。
- 3 次のコマンドを入力します。
`systemtools rootsettings on <password>`

注: ルートのパスワードをシステム (admin) のパスワードと同じにすることはできません。

Cisco TelePresence のエンドポイントでの Cisco Discovery Protocol について

概要

Cisco Discovery Protocol (CDP) は、シスコによって 1990 年代の初めに開発された専用のレイヤ 2 管理プロトコルで、ネットワークの検出と管理の自動化機能を強化するものです。このプロトコルは数百万台におよぶ既存のシスコ製品に幅広く導入されており、管理者ユーザはルータやスイッチ インターフェイスの管理に非常に有効に活用できます。1990 年代の末頃から 2000 年代初頭にかけての IP 電話の導入により、CDP は IP 電話に関する自動化機能を提供できるよう強化されました。これには、自動 VLAN 検出、Power over Ethernet (PoE) のネゴシエーション、Quality of Service (QoS) の自動化、(管理または緊急サービスのための) IP 電話の物理的なロケーションの検出を自動化するための) ロケーション認識、イーサネットの速度や、デュプレックスの不一致の検出などの機能が含まれます。

注: IETF、IEEE、および TIA は、シスコや他の多数のネットワーク ベンダーと協力して、IEEE 802.1AB 標準を策定しました。これはリンク層検出プロトコル (LLDP) と呼ばれ、音声およびビデオ エンドポイントの Media Endpoint Discovery 用に開発された拡張規格 (LLDP-MED) があります。CDP は、最終的に LLDP-MED に取り込まれる予定ですが、インストールベースで幅広く使用されているので、展開には数年間かかると思われます。

シスコは 2010 年 4 月に TANDBERG を買収しました。TANDBERG のビデオ エンドポイントのポートフォリオは、シスコの既存の Telepresence および Unified Communications ソリューションを補完します。CDP のサポートは、Cisco E20 にはリリース TE4.0 で導入され、Cisco TelePresence MX シリーズ、EX シリーズ、Codec C シリーズ、Profile シリーズ、および Quick Set C20 にはリリース TC5.0 で導入されました。Cisco TelePresence SX20 Quick Set では、リリース TC5.1 からサポートされています。

サネット ポートを追加する必要がなくなります。エンドポイントなどのデバイスは、802.1Q 標準を活用して、自身のイーサネット フレームに自身のトラフィックが属する VLAN ID をタグ付けすることができます。これによってこのトラフィックが音声 / ビデオ VLAN (Auxiliary VLAN) に送られます。一方、PC から送信されたイーサネット フレームにはタグは付けられないので、これはデータ VLAN (ネイティブ VLAN) に送られます。これによって、エンドポイントを既存の PC とそれが接続されているイーサネット スイッチとの間に挿入できるようになるので、ユーザごとに単一のイーサネット ポートを使用できるようになります。したがって、ワイヤリング クローゼットにポートを追加する必要がなくなり、既存の PC VLAN 内で IP アドレスを消費することなく別の (新しい) IP サブネットにエンドポイントを割り当てることができます。また、VLAN を使用すると、ネットワーク管理者は VLAN ごとに異なるセキュリティや Quality of Service (QoS) ポリシーを設定できるようになります。

図 1 と 2 は、これらの概念を表しています。

CDP (または LLDP-MED) がないと、ユーザは各エンドポイントに使用する 802.1Q VLAN ID を手動で設定する必要があります。CDP はこの作業を自動化し、使用する VLAN の ID をイーサネット スイッチからエンドポイントにアドバタイズできるようにします。

自動 QoS

QoS は、ネットワークが正常に機能するために不可欠であり、遅延、ジッター、損失に敏感な音声やビデオなどのアプリケーションに優先的にサービスを提供します。ウイルスや他の好ましくないネットワーク トラフィックなどの不正な動作をするアプリケーションは他と区別し、電子メールや Web ブラウジングなどの定型的で時間に厳しくないトラフィックには適正な処理を行います。ただし、QoS の設定や管理は複雑であり、管理者は、ネットワークに入ってくるトラフィックが正しい QoS 値でマークされているという保証を必要とします。PC や、IP ベースの電話機、ビデオ端末など、ユーザが使用するデバイスの場合、管理者は境界ポイントを設定する必要があります。その境界ポイントでは、これらのデバイスから送られる QoS マーキングが信頼できない場合、管理者が設定した値で上書きされます。信頼できる場合は、これらの QoS 値が設定され、イーサネット スイッチはこれらの値を尊重します。この境界ポイント (または信頼性境界) では、これらのデバイスに割り当てられている QoS 値をユーザが偶然 (または意図的に) 変更すると、これらの QoS 値はネットワークに入る際に管理者によってリマークされます。

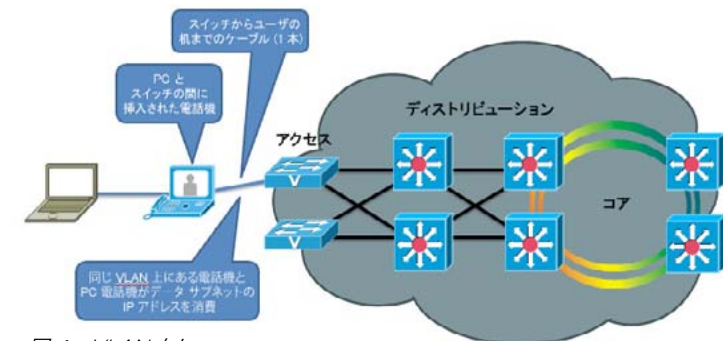


図 1 : VLAN なし

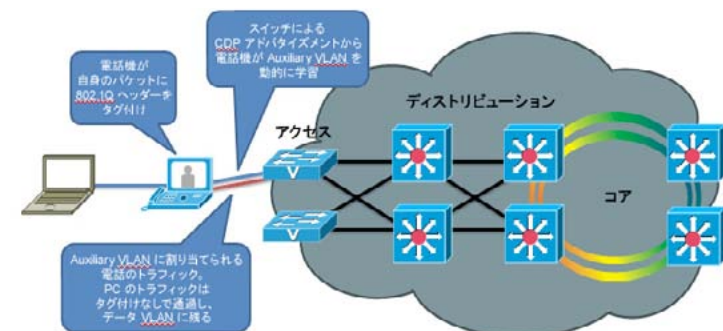


図 2 : VLAN あり

しかし、CDP を実行していない (シスコによる買収前の) エンドポイント モデルのインストールベースが存在しているので、ソフトウェア リリースに CDP を導入する際には、新しい自動化機能によって既存のインストールベースに影響が出ないように注意する必要があります。デフォルトで CDP をイネーブルにすると、これらの既存の展開が CDP 対応のリリースにアップグレードして VLAN 自動化機能を突然使用し始めたときに、予期しない動作が発生するおそれがあるので、CDP の導入は段階的に行っています。

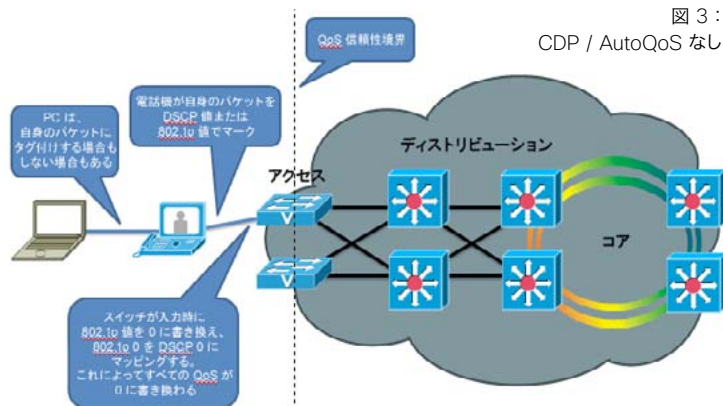
CDP によるメリット

上記の概要で説明したように、IP ベースの音声およびビデオ エンドポイントをネットワークに導入しているネットワーク管理者にとって、CDP を導入すると、自動化において非常に大きなメリットがあります。この項では、Cisco TelePresence MX シリーズ、EX シリーズ、Codec C シリーズ、Profile シリーズ、Quick Set C20、および SX20 Quick Set などの IP ベースの音声 / ビデオ エンドポイントについて最も意味のあるメリットをいくつか説明します。

自動 VLAN 検出

仮想 LAN (VLAN) を使用すると、ネットワーク管理者が IP ベースの電話やビデオ端末をネットワークに導入する際、既存のデータ サブネットのアドレスを割り当て直したり、スイッチにイー

CDP はこの信頼性境界を（管理者の判断によって）自動的に拡張する機能があるので、電話やビデオ端末は自身のパケットを任意の QoS 値でマークすることができます。（当該の特定の電話機のモデルが正常に動作し、値が改ざんされないことを管理者がわかっている）スイッチは、電話のパケットを信頼してそのパケットをネットワークに転送します。この機能は Cisco Catalyst イーサネット スイッチでは AutoQoS と呼ばれています。図 3 と 4 は AutoQoS の概念を表しています。AutoQoS の詳細については、[ここ](#)を参照してください。



Power over Ethernet (PoE) のネゴシエーション

802.3af 標準では、IP ベースの電話機やビデオ端末などのデバイスに対する Power over Ethernet を提供しています。さらに、CDP では、エンドポイントがイーサネット スイッチに必要な電力量を伝え、またスイッチからエンドポイントに利用可能な電力量をアドバタイズできるという機能もあります。したがってスイッチとエンドポイントの間でより詳細なレベルでのネゴシエーションを行うことができ、またイーサネット スイッチでは利用可能な電力バジェットを厳密に追跡することができます。PoE は現在 Cisco TelePresence エンドポイントでは使用されていません。ただし、Cisco Unified IP Phone、ワイヤレス アクセス ポイント、監視カメラなど非常に多数の他のデバイスで幅広く使用されているので、読者に対する有益な情報として説明しています。

図 3:

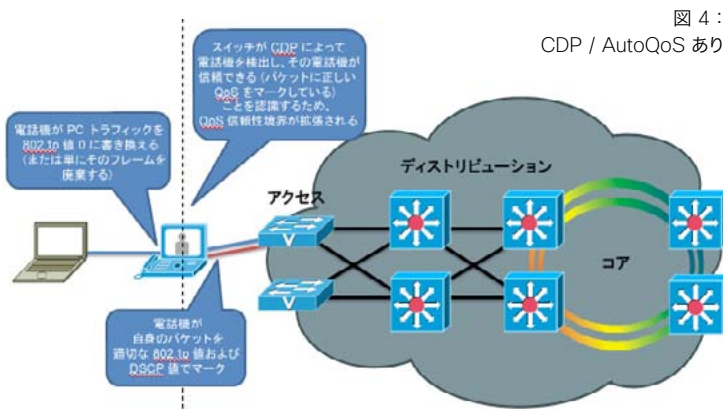
CDP / AutoQoS なし

ロケーション認識

IP ベースの電話機の導入により、IP エンドポイントがネットワーク上のあらゆる場所から接続され、IP エンドポイントでの IP アドレスの取得や通話の開始が可能になる新たなレベルのモビリティが実現しました。それにより、従業員があるオフィスから別のオフィスに移動する場合に、電話回線を物理的に配線するコストも抑えられるようになりました。しかし、一部の管理機能や緊急サービスでは、電話機の正確なロケーションを把握する必要があります。CDP を使用すると、ネットワーク管理アプリケーションで電話機の物理的なロケーションを特定することができます（電話機が接続されているイーサネット ポート、つまり物理的な位置を検出します）。その後、この情報は Cisco Emergency Responder などのアプリケーションによって使用され、緊急サービスの担当者に宛てられた通話が正確な担当部署に転送されます。ロケーション情報には、他にも実際に使用されている用途や、潜在的な用途が多数あります。

図 4:

CDP / AutoQoS あり



ト間で不一致が発生し、このインターフェイスで大きな損失が発生します。CDP ではこのような条件を自動的に解決しませんが、これを検出して、スイッチでアラームを発生させることができます。これによって管理者が通知を受け、解決することができます。

将来のメディアネットの適用

このような CDP の利点は、この数年間、シスコによって実現されてきました。メディアネットは新しい概念であり、エンドポイントとネットワーク間のやり取りをさらに拡張および自動化して、高度なインターネットワークでのマルチメディアトラフィックのエンドツーエンドのさらなる最適化を行います。CDP は数あるプロトコルの中の 1 つであり、Cisco IOS ソフトウェアの将来の世代や、シスコのメディアネット対応のエンドポイントによって、このようなビジョンを実現するために活用される予定です。このドキュメントを書いている時点で利用可能なメディアネットの適用例には、ビデオセッションがネットワークを通過する経路をエンドツーエンドで追跡してパケットの損失の原因を特定する、代替パス上でビデオパケットのルーティングを最適化してネットワークのスループットを最大限に高める、セッションアドミッションコントロールを強化してネットワーク上で許容できるビデオセッションの数を制御するなどがあります。メディアネットの詳細については、[ここ](#)を参照してください。

CDP および LLDP-MED についての詳細は、[次](#)を参照してください。

[『Using Cisco Discovery Protocol』](#)

[『Best Practices for Catalyst 4500/4000, 5500/5000, and 6500/6000 Series Switches Running CatOS Configuration and Management』](#)

[『LLDP-MED and Cisco Discovery Protocol White PaperSCIB』](#)

イーサネットの速度/デュプレックスの不一致の検出

イーサネット デバイスは、802.3 自動ネゴシエーション手順を使用して、それぞれの速度やデュプレックスの設定を自動的にネゴシエートします。しかし、一方または他方において偶然誤った設定が行われていると、パケットの損失が生じます。これはごく一般的な問題です。たとえば、ネットワーク管理者がスイッチ上のすべてのギガビットイーサネットポートに自動ネゴシエーションを設定している場合に、ユーザが偶然自分の PC、IP 電話、またはビデオ端末に 100 Mbps / 全二重などの設定を手動で行ったとします。この場合、スイッチとエンドポイン

リリース TC5.x での CDP の動作

次の説明は、ソフトウェア リリース TC5.0 を実行している Cisco TelePresence MX シリーズ、EX シリーズ、Codec C シリーズ、Profile シリーズ、Quick Set C20、およびリリース TC5.1 以降でサポートされている Cisco TelePresence SX20 Quick Set を対象としています。エンドポイントを初めて起動した場合、または出荷時の初期状態にリセットした後は、次の設定がデフォルトで適用されます。

```
xConfiguration Provisioning Mode: Auto
xConfiguration Network 1 VLAN Voice
Mode: Off
```

その後、エンドポイントにはプロビジョニング ウィザードの画面が表示され、使用するプロビジョニング モード (VCS、Callway、または CUCM) を尋ねるプロンプトが表示されます。

CUCM を選択すると、xConfiguration Provisioning Mode が自動的に CUCM に設定され、また xConfiguration Network 1 VLAN Voice Mode が自動的に Auto に変更されます。また、エンドポイントが CDP を使用して VLAN の自動検出を開始し、パケットへの適切な VLAN ID のタグ付けを開始します。さらにエンドポイントが自身の DHCP リクエストに DHCP オプション 150 を含めることを開始し、これによって UC Manager TFTP サーバのアドレスを自動的に検出できるようになります。

xConfiguration Provisioning Mode を VCS または Callway に設定すると、xConfiguration Network 1 VLAN Voice Mode はデフォルトの Off のままになり、エンドポイントはあらゆる CDP VLAN アドバタイズメントを無視し、自身のパケットに VLAN ID をタグ付けしなくなります。また、エンドポイントは自身の DHCP リクエストに DHCP オプション 150 を含めません。

TMS/VCS の利用者の場合は、この動作によって、このエンドポイントの以前のソフトウェア リリースの機能が維持されます。CDP の使用を希望する場合は、xConfiguration Network 1 VLAN Voice Mode パラメータを Auto に設定して、手動で CDP をイネーブルにすることができます。これを行うには、次の手順を実行してください。

- タッチ インターフェイスから、[管理者設定 (Administrator Settings)] > [ネットワーク設定 (Network Settings)] > [リンク設定 (Link Settings)] を選択するか、On-Screen Display (OSD) メニューから [設定 (Settings)] > [管理者設定 (Administrator Settings)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] > [ネットワーク 1 (Network 1)] > [VLAN 音声モード (VLAN Voice Mode)] を選択します。
- 管理用の Web ページのユーザ インターフェイスから、[設定 (Configuration)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] > [ネットワーク 1 (Network 1)] > [VLAN 音声モード (VLAN Voice Mode)] を選択します。

- API/CLI コマンドの xConfiguration Network 1 VLAN Voice Mode を実行します。

CUCM の利用者の場合、最初に起動するとき、この余分な手順が加わりますが、一度起動ウィザードで CUCM モードが選択されると、次からは CDP が自動的に起動し、電話機が Auxiliary (音声 / ビデオ) VLAN に参加するようになります。利用者が CDP の使用を希望しない場合は、xConfiguration Network 1 VLAN Voice Mode パラメータを手動で Off にして CDP をディセーブルにすることができます。

利用者が CDP 対応のイーサネット スイッチを持っていないもの、802.1Q VLAN の使用を望んでいる場合は、xConfiguration Network 1 VLAN Voice Mode パラメータを Manual に設定し、対応する xConfiguration Network 1 VLAN Voice ID パラメータを適切な値に設定することができます。

これらのパラメータを設定すると、設定は保存され、その後のリポートでも維持されます。その後、利用者がこれらのパラメータを変更したいと考えた場合は、起動ウィザードを再度実行するか、手動で設定します。

以前のリリースから TC5.x へのアップグレード

以前のリリースからリリース TC5.x にアップグレードした既存の利用者の場合は、これらのパラメータの値は維持され、起動ウィザードは表示されません。また、この利用者には動作も変化していないように見えます。しかし、xConfiguration Network 1 VLAN Voice Mode パラメータの値は変更されていることに注意してください。以前のリリースでは、このパラメータの有効な値は Untagged または Tagged であり、デフォルトは Untagged でした。リリース TC5.0 以降では、CDP のサポートの導入により、これらのパラメータの有効な値は、Auto、Manual、Off のいずれかになっています。以前の値は、アップグレード中に新しい同等の値にマッピングされます。

注：xConfiguration API リクエストで新しい値（たとえば、Untagged の代わりに Off、Tagged の代わりに Manual、または新しく Auto）を使用するためには、管理アプリケーションをアップグレードする必要があります。

次の表 1 では、古い値と新しい値の関係を示しています。

注：DHCP プロセスは、実際には起動ウィザードが表示される前にバックグラウンドで実行されます。これは、最初の起動中または出荷時の初期状態へのリセット後に、エンドポイントは最初にネイティブ VLAN で DHCP リースを取得することを意味します。[VLAN 音声モード (VLAN Voice Mode)] に [自動 (Auto)] を選択し、CDP が VLAN を使用する必要があることを示している場合は、エンドポイントがネイティブ VLAN で受け取ったアドレスを解放し、IP スタックを再開して、Auxiliary VLAN に新しいアドレスを DHCP で割り当てます。これによって、最初の起動中にネイティブ VLAN の IP アドレスが一時的に使用されることがあります。

要約

このドキュメントでは、Cisco Discovery Protocol (CDP) の歴史とメリットや、ソフトウェア リリース TC5.0 以降を実行している Cisco TelePresence MX シリーズ、EX シリーズ、Codec C シリーズ、Profile シリーズ、Quick Set C20、およびリリース TC5.1 以降でサポートされている Cisco TelePresence SX20 Quick Set での動作について簡単に説明しました。CDP は音声 / ビデオ デバイスへの VLAN と QoS の適用を自動化する強力なメカニズムです。現在 TANDBERG を使用している利用者には、このメリットを体験し、ネットワークを準備して、VLAN、AutoQoS、および VLAN ベースのセキュリティ ポリシーを TANDBERG エンドポイントに活用することをお勧めします。

以前のリリース	リリース TC5.x	コメント
	Auto	Auto モードはリリース TC5.0 で導入
Tagged	Manual	Manual は以前のリリースでの Tagged と同じ
Untagged	Off	Off は以前のリリースの Untagged と同じ

表 1：新旧の VLAN のタグの値

シスコ Web サイト内のユーザ ドキュメンテーション

ユーザ ドキュメンテーションは次の URL から入手できます。

▶ <http://www.cisco.com/go/telepresence/docs>

お使いの製品に応じて、次の製品体系に従い該当製品を選択します。

EX シリーズ :

TelePresence

- > TelePresence エンドポイント - パーソナル
- > TelePresence デスクトップ
- > Cisco TelePresence System EX シリーズ

または www.cisco.com/go/ex-docs

Codec C シリーズ :

TelePresence

- > TelePresence ソリューション プラットフォーム
- > TelePresence インテグレータ向け製品
- > Cisco TelePresence System Integrator C シリーズ

または www.cisco.com/go/cseries-docs

Quick Set C20 および SX Quick Set :

TelePresence

- > TelePresence ソリューション プラットフォーム
- > TelePresence インテグレータ向け製品
- > Cisco TelePresence Quick Set シリーズ

または www.cisco.com/go/quickset-docs

MX シリーズ :

TelePresence

- > TelePresence エンドポイント - 多目的
- > Cisco TelePresence MX シリーズ

または www.cisco.com/go/mx-docs

Profile シリーズ :

TelePresence

- > TelePresence エンドポイント - 多目的
- > Cisco TelePresence System Profile シリーズ

または www.cisco.com/go/profile-docs

Cisco IP Video Phone E20 :

TelePresence

- > TelePresence エンドポイント - パーソナル
- > TelePresence VOIP Extensions

ドキュメント カテゴリ

各製品のドキュメントは次のカテゴリに分類されています。

ユーザ ガイド :

[保守と運用 > エンドユーザ ガイド](#)

クイック リファレンス ガイド :

[保守と運用 > エンドユーザ ガイド](#)

インストール ガイド :

[インストールとアップグレード > インストールとアップグレード ガイド](#)

スタートアップ ガイド :

[インストールとアップグレード > インストールとアップグレード ガイド](#)

管理者ガイド :

[保守と運用 > メンテナンスとオペレーション ガイド](#)

API リファレンス ガイド :

[リファレンス ガイド > コマンド リファレンス](#)

物理インターフェイス ガイド :

[保守と運用 > エンドユーザ ガイド](#)

法令準拠および安全上の注意 :

[インストールとアップグレード > インストールとアップグレード ガイド](#)

TC ソフトウェア リリース ノート :

[リリースと一般情報 > リリース ノート](#)

TC ソフトウェア ライセンス情報 :

[リリースと一般情報 > ライセンス情報](#)

ビデオ会議室ガイドライン :

[設計 > 設計ガイド](#)

注 : 製品によって、提供されるユーザ ドキュメンテーションの種類が異なります。

知的所有権

このマニュアルに記載されている仕様および製品に関する情報は、予告なしに変更されることがあります。このマニュアルに記載されている表現、情報、および推奨事項は、すべて正確であると考えていますが、明示的であれ黙示的であれ、一切の保証の責任を負わないものとします。このマニュアルに記載されている製品の使用は、すべてユーザ側の責任になります。

対象製品のソフトウェア ライセンスおよび限定保証は、製品に添付された『Information Packet』に記載されています。添付されていない場合には、代理店にご連絡ください。

The Cisco implementation of TCP header compression is an adaptation of a program developed by the University of California, Berkeley (UCB) as part of UCB's public domain version of the UNIX operating system. All rights reserved. Copyright © 1981, Regents of the University of California.

ここに記載されている他のいかなる保証にもよらず、各社のすべてのマニュアルおよびソフトウェアは、障害も含めて「現状のまま」として提供されます。シスコおよびこれら各社は、商品性の保証、特定目的への準拠の保証、および権利を侵害しないことに関する保証、あるいは取引過程、使用、取引慣行によって発生する保証をはじめとする、明示されたまたは黙示された一切の保証の責任を負わないものとします。

いかなる場合においても、シスコおよびその供給者は、このマニュアルの使用または使用できないことによって発生する利益の損失やデータの損傷をはじめとする、間接的、派生的、偶発的、あるいは特殊な損害について、あらゆる可能性がシスコまたはその供給者に知らされていても、それらに対する責任を一切負わないものとします。

Cisco and the Cisco Logo are trademarks of Cisco Systems, Inc. and/or its affiliates in the U.S. and other countries. A listing of Cisco's trademarks can be found at www.cisco.com/go/trademarks. Third party trademarks mentioned are the property of their respective owners. The use of the word partner does not imply a partnership relationship between Cisco and any other company. (1005R)

このマニュアルで使用している IP アドレスおよび電話番号は、実際のアドレスおよび電話番号を示すものではありません。マニュアル内の例、コマンド出力、ネットワークトポロジ図、およびその他の図は、説明のみを目的として使用されています。説明の中に実際のアドレスおよび電話番号が使用されていたとしても、それは意図的なものではなく、偶然の一致によるものです。

TANDBERG はシスコの一部です。TANDBERG® は Tandberg ASA に帰属する登録商標です。